

特集

海岸植物の保全 ～ハマユウとハマボウを例にして

文：中西弘樹(長崎大学教育学部教授)

少し暖かくなった春の海辺は、潮回りも良く、生きもの観察や漂着物調べ、そして海岸植物の観察にも恰好の季節です。

しかし、近年、ダムによる河川からの土砂供給の減少による海岸浸食や後背地の人工化の影響などにより、海岸植物は全国的に衰退を続けているといえます。

今号では、海岸植物の生態と海流散布植物研究で著名な長崎大学の中西弘樹先生に海岸植物の保全についてご寄稿いただきました。



海岸植物の特徴

海岸は海水の飛沫や強風、波浪の影響、強い紫外線、砂浜や岩地など土壤の未発達なことなど、植物の生育にとってきびしい環境にあります。そのような環境に適応し、進化した植物が海岸植物であります。内陸の植物に比べて、葉が厚かったり、毛で被われていたり、逆に葉に光沢があったり、草丈の割に大きな花を咲かせるなどの特徴があります。きびしい環境

に適応したという点では高山植物と似ています。実際に海岸植物がいっせいに花を咲かせている季節に行くと、高山のお花畑と変わらない美しい景観を呈します。それにもかかわらず、高山植物のように保護されている所はほとんどなく、海岸の浸食の影響もあって、残念ながら衰退の一途をたどっています。

ハマユウとハマボウの分布

海岸植物の種子散布の方法は、

基本的には内陸の植物と変わりませんが、一つだけ著しい特徴があります。それは海流によって種子を散布する植物があることです。海水はふつうの陸上植物にとって有害なもので、海は分布拡大の障害となっています。しかし、その海にある流れを利用して分布を拡大している植物が、海流散布植物です。ここに紹介するハマユウもハマボウも海流散布植物です(図1)。ハマユウはハマオモトとも言われ、ヒガンバナ科の多年草で、ふつう砂礫海岸の

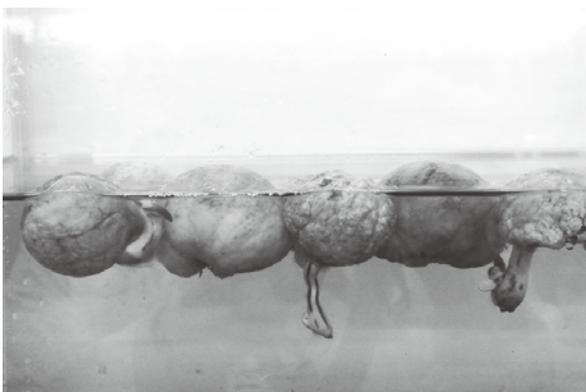


図1 海水に浮きながら発芽するハマユウの種子



図2 ハマユウの群落

図3 ハマユウの分布

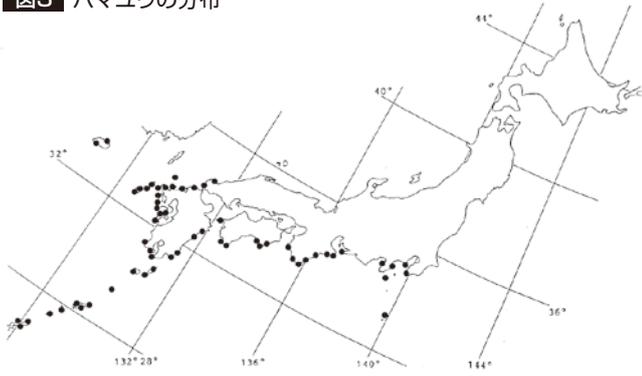
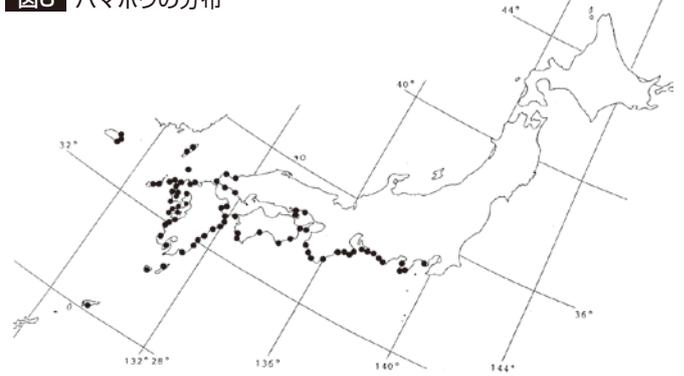


図6 ハマボウの分布



安定地に生育しています。初夏から白色の美しい花を次々に咲かせます(図2)。ハマユウは万葉集にも歌われ、源氏物語や枕草子などさまざまな古典にも登場する、古くから知られた植物です。種としてのハマユウは東南アジアを中心に西はインド、東はハワイ諸島、南はオーストラリア東岸、そして北は日本の房総半島南部まで海流によって広がっており、いくつかの変種に分けられています(図3)。ハマボウはアオイ科の落葉低木で、ハイビスカスと同じ仲間です。河口付近や内湾の塩湿地に生育しており、純群落を形成していますので、その景観はマングローブと似ています(図4)。花は薄黄色で、7月に美しい花を咲かせます(図

5)。ハマボウは奄美大島から神奈川県三浦半島までと韓国済州島に分布していますが(図6)、近縁種のオオハマボウは世界の熱帯・亜熱帯に分布し、それからハマボウが種分化したものと考えられています。

海岸植物の減少の原因

野生生物種の減少の最大の理由は生息・生育地の消失ですが、海岸植物も同様に、護岸工事、埋立て、海岸浸食などが全国的におきています。港湾周辺の地域は工業地帯となり、海岸が見えない状況となっています。海岸線が港湾、埋立てなど土木工事によって改変されている海岸

を人工海岸といい、海岸に沿って道路や護岸ができてきているものの、汀線が人工によって改変されてない海岸を半自然海岸とよんでいます。しかし、半自然海岸も海岸植物は多くが破壊されている状況です。自然海岸は日本の海岸線の50%ぐらいしかありません。これは人が汀線に近づくことができない海岸崖地も含んでいますので、実際に波打ち際から内陸部まで自然が残っている海浜はごくわずかしかありません。そのような海浜も、ダムの建設によって砂が供給されなくなり、浸食が進んでいます。

また、野生生物種の絶滅の他の原因に密猟や盗掘があります。花が美しいラン科植物やカンアオイ類などの



図4 マングローブに似た景観のハマボウ群落



図5 7月に満開となるハマボウ。薄黄色の花を咲かせる

珍しい草花は、業者や一部の愛好家よって盗掘にあっています。

ハマユウとハマボウの減少

ハマユウは今でこそあまり盗掘が問題となっていませんが、歴史的に見ますと、最も古くその被害を受けた植物です。いろいろな記録から昭和の初期にはすでに野生のものが掘り取られ、栽培されていたことがわかっています。今でこそ多くの園芸植物がありますが、かつては花の少ない夏に、美しい白色の花を咲かせるハマユウは、園芸用として人気があったのでしょう。本州南岸や四国、九州などの海岸近くの古い民家には必ずと言っていいほど、ハマユウが植えられていました。それらは自生地から掘り取られたか、その株を起源とするものに違いありません。古い天然記念物の報告書を調べてみると、福岡県の報告書(1934)の中に「現存生育地の何れに於いても、人為による過度なる採集によりて漸次衰微状態に入りつつある状況歴然たるものがあり」と記されていますし、愛知県伊良湖岬の報告書(1934)では「乱獲せられた為に殆ど絶滅した」とあります。また、静岡県報告書(1937)にも「観賞の目的をもって近年好事家の乱採する所となり、漸く其の量減少しつつあり」とあります。このように80年くらい前から盗掘にあったり、すでに絶滅した所もあったことがわかります。

一方、ハマボウは民家近くにあまりなかったせいでしょうか、近年まであ

まり注目されてきませんでした。ハマボウの生育地の消失の最大の原因は、埋立てと護岸工事です。静岡県では千株以上が生育すると言われていた南伊豆町青野川の大群落が河川改修で激減したのをはじめ、三保半島の内湾側にあった群落が埋立てによって消失するなど、各地の生育地が消失しました。長崎県対馬市上県町の佐護川下流は、日本海側の北限で、およそ60株が自生していましたが、護岸工事により消滅しました。千葉県や大阪府、広島県なども絶滅したと考えられます。環境省のレッドデータブックには記載されていませんが、府県別のレッドデータブックでは、分布しているほとんどの府県で絶滅危惧種として指定されています。

海岸植物の保全

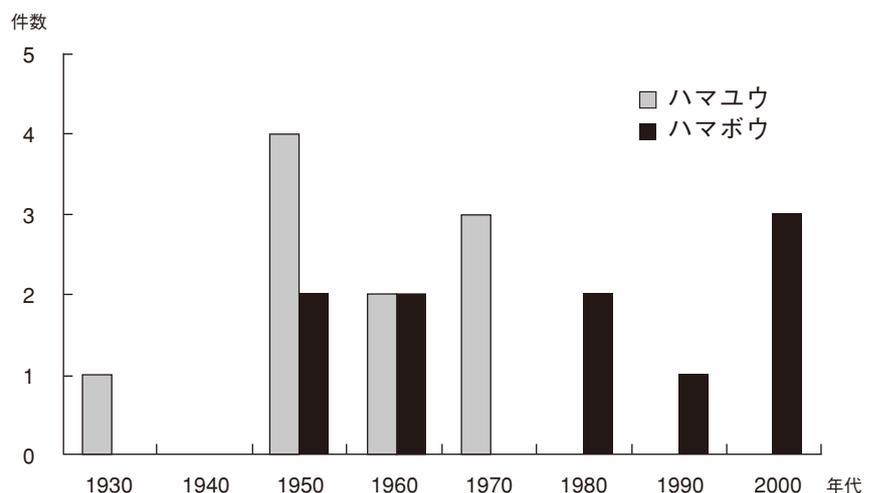
野生生物の生息・生育地を法的に保全する方法には、天然記念物に指定するとか、国立公園や国定公園では特別保護地区や特別地区に指

定する、県の自然環境保全地域に指定するなどがあります。高山植物の場合は、多くが国立公園、国定公園の特別保護地区に指定され、パトロールをするなど厳しい規制や監視が行われています。しかし、海岸植物は、国立公園の中でも公共事業のためにその生育地が破壊されてきましたし、保護の対象になっているところはまれです。

ハマユウとハマボウの保全

ハマユウが県指定の天然記念物になっている例は2件あり、最も古く指定されたのは1936年に三重県志摩市和具大島、次いで1952年静岡県下田市田牛の群落です。県指定に遅れて、市・町・村レベルの天然記念物も4件が指定されました。宮崎県では1964年にハマユウを県の花として制定しました。同じように市・町・村でも郷土の花として制定しようとする自治体が増え、ハマユウは全国で34の自治体(平成の大合併の前)が制定しており、自生植物としては最も多い件数です。

図7 ハマユウとハマボウの年代天然記念物指定件数



一方、1950年代から1970年代にかけて、ハマユウは宮崎県や和歌山県白浜、三重県伊勢などの観光地のシンボルとしてポスターや観光パンフレットなどに頻繁に掲載され、その自生地も注目されるようになりました。

ハマボウはそれよりもかなり遅れてその価値が注目されるようになり、県指定は神奈川県と愛知県の2件、市・町指定は7件があります。しかし、2008年になって鹿児島県南さつま市万之瀬川の群落が国の天然記念物に指定されました。図7にハマユウとハマボウの天然記念物の年代別の指定件数を示しました。両種の天然記念物指定年代にはっきりとした違いがあることがわかります。ハマボウは郷土の花としては、県の花や木に指定された例はありませんが、市の花は、1983年に徳島県鳴門市が市の花に、

1994年に和歌山県御坊市が市の花木に制定しています。さらに平成の大合併の後、2009年に熊本県天草市が市の花に、同じく長崎県西海市が市の花木に、2011年になって福岡県糸島市が市の花にそれぞれ制定しました。

最近になってハマボウ群落の貴重さが認識されるようになり、いくつかの町では地域おこしのシンボルとして「はまぼう祭り」などのイベントが行われたり、「はまぼう公園」が整備されたり、花の季節には観察会などが開かれています。

以上のように、ハマユウは日本に自生する植物の中では、古くから注目され、それとは対照的にハマボウは最近になって注目されるようになったと言えるでしょう。しかし、その保全の仕方は、必ずしも適切とは言えません。

ハマユウは多くの草本と一緒に生育し、群落を形成していますが、保護されている所に行くと、ハマユウ以外の草本をすべて取り除いてしまい、純群落ができています。見た目には美しいのですが、決して自然のハマユウ群落ではありません。

ハマボウは特徴のある立地に生育しているのですが、あちこちの海岸に植えられ、中には砂浜にも植栽されている場合も各地に見られます(図8)。それらは誤った植栽で、自然の植生復元とはなっていません。

生育地の保全や植生復元などの実践は、地元住民と行政、研究者の三者が協力して成功するものです。日本は周りを海で囲まれており、海岸植物は身近で、ふつうのものでした。しかし、今では消滅してしまった地域もあり、貴重なものとなっています。この自然をいつまでも残しておきたいものです。

図8 誤った場所へのハマボウの植栽



中西 弘樹
なかにし ひろき

名古屋生まれ、広島大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士、長崎女子短期大学などを経て、現在、長崎大学教育学部教授、漂着物学会会長。専攻は植物生態学。

主な著書:『海流の贈り物—漂着物の生態学』、『種子ひろがる—種子散布の生態学』、『漂着物学入門』(以上すべて平凡社)、『海から来た植物』(八坂書房)、『日本野生植物館(共著)』(小学館)など。